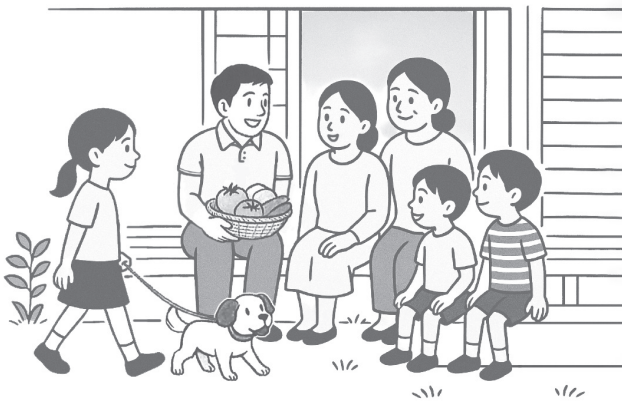
縁側にて ⑤



読み聞かせで地域と世代をつなぐ

藤田医科大学特命教授・地域共生社会推進センター長　堀江 裕

9月末に公表された国勢調査結果によれば、平均世帯人員は2・1人。1975年に3・4人、2000年に2・7人だったものが減り続けている。都市化と過疎化が進み世帯人員が減少する一方、孤立死とみられる人が年間2万人を超えるなど、社会のつながりの希薄化が顕著になっている。

家族や地域社会のつながりを取り戻せるような活動を広げたいと、NHKでアナウンス室長を務めた山根基世さんが、子どもたちに読み聞かせを行っている。私が学生だった頃、テレビを通じて明快で落ち着いた声の山根さんの解説やニュースに聞きいった。人気を博したテレビドラマ『半沢直樹』では、強い言葉が飛び交う中でナレーターを務め、静かな言葉遣いで番組を落ち着かせる役割を担い注目された。

山根さんが読み聞かせに本格的に取り組み始めたのは、NHKを退職してから。『ごんぎつね』の作者、新美南吉の出身地である愛知県半田市で、地元のグループから朗読会の相談を受け、大人、子ども、先生たちと半年間準備を行い、2013年に実施した。こうした活動に触れた子どもたちが成長し、それぞれの地域で人々と交流することで、笑顔と温かい会話が広がっているのではないか。

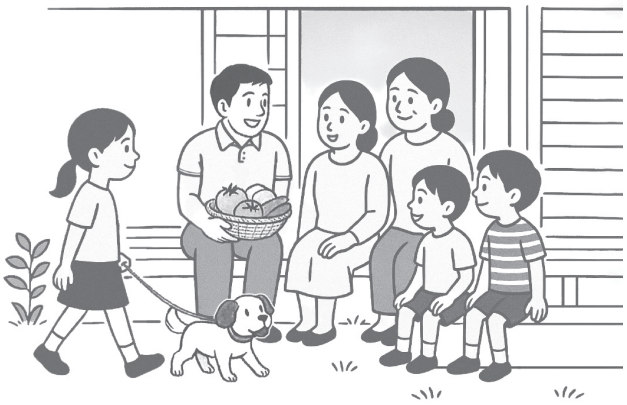


山根さんは、作者の心を読み取って、聞いている人の心に届けることを大切にする。内容をつかむためには黙読百回、内容を理解した上で、相手に話しかけるように読むのが大切と話している。昨今の学校教育は、みんなの前で堂々と喋る技術の指導に偏り、ディベートなど、相手をやっつける言葉は覚えても、いま悲しんでいる人をどうやって温かい心にしていくのか、人間の最も学ばなければならない原点が身についていないと憂える。地域で見受けられた井戸端会議のような場も見えなくなり、人間関係が希薄化している。今こそ作者の思いを読みとり、互いに心を通わせられる子どもを育てたいという。読み、話し、聴く。本欄「縁側にて」の趣旨とも重なり、意を強くする。

コロナ禍以来、リモート、非接触の風潮が広がり、顔を合わせず、会話すらせずAIを駆使する傾向が強まっている。こういう時代だからこそ、人と人とが対面で心を通わせ、交流で社会のつながりを広げることが重要となる。これはAIでは代替できない。

勤務先は医科大学。患者が話しやすい環境を整え、その声に耳を傾け、患者にわかりやすく伝えられる医療者が育ち、そうした医療が実践されることが大切なのはいうまでもない。

縁側にて ④



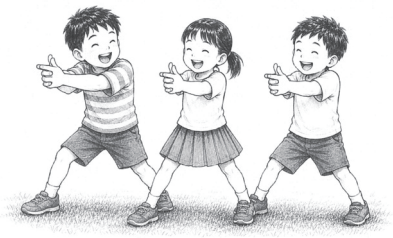
トム・クルーズさんと跳ねる

藤田医科大学特命教授・地域共生社会推進センター長　堀江 裕

「ミッション：インポッシブル」。不可能なことはできるわけがないと言っては身も蓋もないのだが、60歳を超えてなお、トム・クルーズさんは危険なアクションにも自ら挑む。その姿を見るたび、「ここまでやるのか」と驚かされる。

英国の007シリーズは主演俳優が世代交代を重ねてきた。一方、米国の「ミッション：インポッシブル」は約30年にわたり、トム・クルーズさんが主人公イーサン・ハントをひとりで演じている。車やバイクはプロ級で、飛行機やヘリコプターも自ら操縦。限界に挑み続ける姿勢にこそ、多くのファンを惹きつける。スター気取りで退廃的な生活を送る暇などない！

惹きつけるのはファンだけではない。「彼は、撮影現場の人たちが最高の仕事をできるよう励ましてくれる。」といった撮影チームからの賛辞が多く見られる。理想の同僚、理想のボスとして、多くの人が集まってくるようだ。



しかし、華やかなスクリーンに至る道のりは、決して平たんではなかった。家庭環境が恵まれず、本人もディスレクシア（読字障害）があり、文字を読み覚えるのに苦労した。本人は、読んだ内容を頭の中で映像化しながら理解する方法を身につけたと語っている。色々な困難を経験しながら、自分が勝負できるカードを磨いてきたのだろう。

危険なスタントを自ら演じ、全員で力が出せる環境を整える。困難が大きかった分、入念に人生の持ち札を蓄え、大胆に勝負ができたのかもしれない。映画を見ながら、トム・クルーズさんの人生の「ミッション：インポッシブル」の大立ち回りを見るような爽快さを感じる。

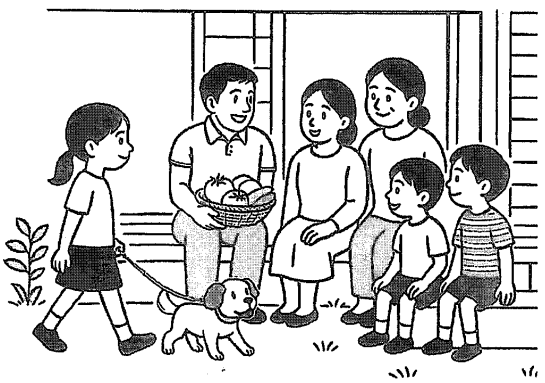
そう書くと、トム・クルーズさんの世界は特別な世界のように響く。しかし、私には、私たちの日常につながって見える。

髪が伸びれば、お気に入りの理容師さんに調髪してもらう。梅雨時に家の中にアリが出れば、いつもお願いしている工務店さんに相談する。工務店さんも、八百屋さんに旬の夏野菜のおいしい食べ方を教わっているかもしれない。家族や同僚に助けられるのは言うまでもない。自分だけで力んでいても空回り。誰かが役割を引き受け、支え合いながら一日が終わり、また次の日が始まる。

トム・クルーズさんは、人を楽しませる役割を選び、その役割を磨き続けてきた。私に見えるのは演技を通じた人柄だけなので全貌は知りようがないが、妥協なしで懸命に演技を続けるトム・クルーズさんの次のミッションを応援したい。

縁側にて ③

試練の先の銀メダル



藤田医科大学特命教授・地域共生社会推進センター長　堀江 裕

ミラノ・コルティナ2026パラリンピックが先日閉幕した。3月13日には、パラスノーボードで小栗大地選手が、金メダルに0・08秒及ばずも、堂々の銀メダルを獲得した。45歳の快挙。

小栗選手は、もともとプロのスノーボーダーだった。競技と仕事を両立させながら、次の舞台を目指していた。ところが、32歳の時の事故。工場で約2トンの鉄板が崩れ、右脚が下敷きになった。

多くの人には、競技人生の終わりを覚悟する大事故だろう。小栗選手は違った。救急搬送の間に思考を切り替えた。義足でも滑ることはできないか。残された条件で何ができるかを考える。そこからパラスポーツへとつながっていく。

ここで注目されるのが、勤務先の社長だ。事故により、従業員に障害を負わせてしまった。起きた事故を前に謝罪する。ところが社長は謝罪だけでなく、社員の夢の実現に向け、支援することを選んだ。入院中に頻繁に見舞うところから始め、競技用の義足も用意した。最初のパラリンピック、2018年の韓国・平昌(ピョンチャン)大会には、会社で応援団を組んで出かけたという。



小栗選手と社長の間でどのような言葉が交わされたかは知る由もない。ただ、結果として、支援する側とされる側という関係にとどまらず、夢の実現に何が最善かをともに考える関係が形づくられていったように見える。事故が関係を断つのではなく、別のかたちへと組み替えられた。

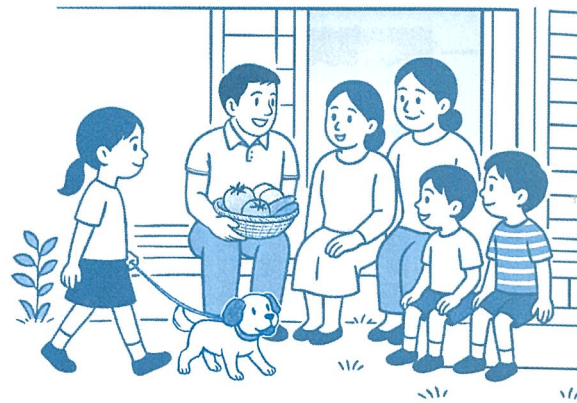
パラリンピックの輝きのようなものが現れた。オリンピックが「より速く、より高く、より強く」を競う場だとすれば、ここにあるのは、「勇気、決意、インスピレーション、平等」といった、別の価値体系だ。インスピレーションが広がる。

事故に挫けず、夢を実現しようと踏ん張った小栗選手。どうすれば事故に自分なりに向き合えるか考えぬいて実行した社長。パラリンピックが障害者スポーツにとどまらない人々の可能性を見せた瞬間だ。銀メダルまでの道のりを知ると、より速くだけではないストーリーが感じられる。一人ひとりのパラアスリートにストーリーがある。私たち皆にあるように。

小栗選手は、銀メダル獲得に喜びつつ、「目標が残って良かった。」と4年後の2030年フランス・アルプス大会での金メダルの夢を語り始めたという。夢の高さと強さは誰にも止められない。また別のストーリーを見せてもらいたい。

縁側にて ②

ほどほどで、明日も楽しみ
大相撲 玉鷲関



藤田医科大学教授・地域共生社会推進センター長　堀江 裕

本年もよろしくお願いします。

大相撲初場所が始まる直前の入稿で、掲載される頃には結果が出ているのですが…。ここ数場所、玉鷲関から目が離せない。40歳で新横綱・大の里を破るなど、強豪力士を脅かしている。

大相撲は、実力一本で番付で評価される厳しい世界。玉鷲関は、自力で番付を確保し、幕内の大舞台で大活躍。そんな玉鷲関のテレビ画面越しから自然に伝わる印象は、相撲を楽しんでいる姿だ。強い力士には勇敢に挑み、勢いある新鋭に対しては挑戦をはねつける壁となる。勝てばよしよし、負ければ残念、また明日。力みも悲壮感もないのが魅力だ。

41歳での大活躍が話題になっているので報道からいろいろ読むと、第一線で活躍を続ける秘訣は、どうやら「ほどほど」を心得た自己管理のようだ。

玉鷲関は、自らを追い込む稽古や過剰な筋力強化とは一線を画すとのこと。出場を続けるための最優先は、怪我を防ぎ、土俵に上がれる状態を保つことだ。調子が良い時には身体を過度にいじらず、無理しない。相撲力士の印象と違い、お酒を余り飲まず、周囲と群れず。モンゴル出身の妻と子どもふたりと過ごす時間を大切にし、趣味は裁縫。モンゴルの大学生だった時、たまたま日本の大学に留学中の姉を訪ねて来日したのがきっかけで、ホテルマンになる目標を変えて相撲部屋に入門したエピソードも、なんとも力が抜けていて、微笑ましい。



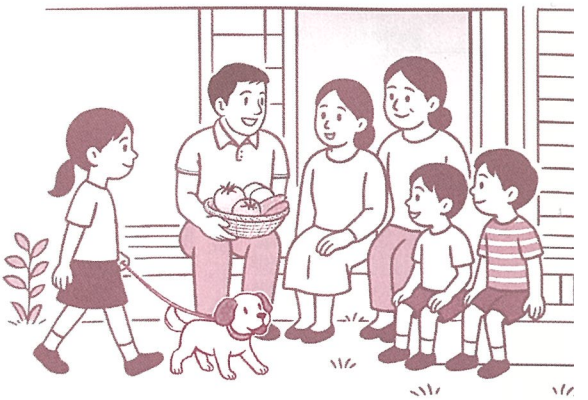
一方で、当然だが、勝負への意欲は強く、変わらない。小さな部屋に所属。同部屋に強い力士がいないとなれば、普通なら出稽古に行きそうだが、玉鷲関は違う。相撲に集中するため外出を控え、同部屋の若手ふたりに一度にかかってこさせて稽古してきたとのこと。現状を憂えず、工夫を重ねて、結果が出せると、してやったり。どうやら相当にポジティブな性格のようだ。結果、優勝2回。それも34歳と37歳と遅咲き。

やや強引だが社会保障の文脈で見れば、玉鷲関の姿勢からは、中高年の就労や社会参加に大きな示唆を感じる。無理に張り切らず、自分なりの挑戦を長く続けられることは、健康維持や生活資金確保とは別の次元の自己充足につながる。昨日は一番やって見せた、今日は残念、明日は頑張ろう。玉鷲関が土俵の上で体現しているその生き方を、今後も見つめていきたい。

せっかくの名古屋勤務。名古屋場所の折には、玉鷲関が楽しく稽古する支度部屋を訪ねたい。

縁側にて①

デフリンピックとコミュニケーション



藤田医科大学教授・地域共生社会推進センター長　堀江 裕

本年11月15日から26日、東京でデフリンピックが開催される。聴覚障害者のための4年に1回の国際大会であり、IOCから呼称使用を認められている。肢体不自由、視覚障害、知的障害のある選手を対象とするパラリンピックよりも歴史は古く、発足から100年を迎えた。日本では初めての開催だ。

デフリンピックにハンマー投げで既に4回出場し、前回のブラジル大会で見事金メダルを獲得した石田考正（たかまさ）選手に、愛知県にお住まいのご縁もあり、本学への来学をお願いした。学生に講義、教職員に講演で「金メダリストが語る目標のかなえ方」との演題。5回目の出場が内定していて大会直前で恐縮ながら、学生が夏休みから戻った初日に登壇をお願いした。日常のコミュニケーションの難しさとデフリンピックへの挑戦が話された。

まずは、コミュニケーション。外見では障害が分かりにくい聴覚障害は、人々の理解が得られにくい。例えば契約に際し、詳細に理解するために筆談を求めても応じてもらえない場合も多いとのこと。それでも、20年前と比べると、手話で話しかけてくれる人が増えていると実感。相手の顔を正面から見て、可能ならマスクを外し、筆談や音声の文字変換アプリを活用するなど、伝える意思を持つと、コミュニケーションは進む。正確さにこだわらず、積極的に伝えて欲しいと話された。



デフ・スポーツでは、競技のスタートでは「ピストル音」の代わりに「光の点灯（スタートランプ）」が使われる。講義では、医療職を志す看護学生が、違いに戸惑いながらも、全員スタートダッシュを体験した。縁側から見える放課後の子どもたちのかけっこ似た雰囲気。その場は初めての緊張、笑ってしまうような失敗、そして温かさに包まれた。

金メダル獲得までに4大会を要した石田選手。勝つための秘訣を参加者から尋ねられると、ひと言、「あきらめたら、それでおしまい」とのご回答。

苦労の多いコミュニケーションも、なかなか順位が上がらなかったデフリンピックの成績も、石田選手は粘り強く取り組み、その精神力は筋金入り。参加者一同、いかなる挑戦も、戸惑ってもひるまず、巧拙で萎縮せず、努力を続ける意義を共有した。

折しも本年6月、国会で手話施策推進法が全会一致で成立した。国連の障害者権利条約に手話は言語と定義されてから20年近く。ここでも関係者のあきらめない決意と努力が結実した。デフリンピック東京開催に間に合って良かったと思う。